ダンス・イン・ザ・マフィア　４

ダンス・イン・ザ・マフィア　4

EntsCat

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=19010258

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻総受け, ♡喘ぎ, 芹霊

誰得？俺得！なマフィアパロです。師匠総受けです。暴力描写や殺人描写を含みます。今回は芹霊を含みます。お好きな方はよろしくお付き合いください。倫理がアレ。

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

Table of Contents

ダンス・イン・ザ・マフィア　４

レイゲン・ファミリアの客間で、霊幻はエクボ、茂夫、律をひかえさせて、輝気と対面していた。
「これから尋問を行う。嘘偽り無く、真実を口にしてくれ。そのためにまず、俺に血の誓いをして欲しいんだが──」
「もちろんです。あなたは僕の心臓、僕はそこを流れる血の一滴に過ぎない。僕に流れる血液は、全てあなたのものです」
そう言って霊幻の革靴の甲に口付ける輝気。
重い誓いに部下がざわつく。霊幻もそこまで望んでいなかったらしく、居心地が悪そうだ。
「……ま、時間がかかるし、ソレでもつまみながら付き合ってくれや」
甘いカフェオレとお菓子を出されて輝気は戸惑う。
霊幻さんは子供には甘いから、と律が呟いた。
「お前が襲ったファミリアでしたことを洗いざらい吐いて貰う」
「したことも、何も……ドンを殺せばあと幹部は洗脳で言いなりでしたし……あ、でも怪しんで僕を殺そうとした人達は返り討ちにしたかな」
「そもそもなんでこんなことをしたんだ？ビジョンが見えねぇよ。マフィアをめちゃくちゃにしたいだけの行動に見える」
「……見えてるじゃないですか」
うっそりと美しく輝気が笑う。
「僕は裕福な家庭で育ちました。幸せだった。──マフィアが僕の母をヤク漬けにして、財産を奪われるまでは」
霊幻は眉をひそめる。
「僕が気付いた時には遅かった。ヤク欲しさに母は財産をマフィアに差し出していて、それに気が付いた父はマフィアと闘おうとして殺されて──能力を持っている僕に相談してくれれば良かったのに、子供だからって守られて……そのせいで僕は全てを失った」
マフィアの世界では奪われる方が悪い。だが霊幻はそうは思わない。一般人に手を出したヤツを嫌悪した。

「……やったやつは見つかったのか？」
「……まだです」
悔しそうに輝気は唇を噛む。
「お前はこの世界のことを何も知らない。だから片っ端からマフィアを襲ったんだろうが……情報屋を使わないとおそらく仇は見つからないだろうな」
「……」
「それに、お前がめちゃくちゃにしたマフィアって組織は、悪事だけやってる訳じゃねえ。貧乏人のセーフティネットなんだよ、この街じゃあな。マフィアに所属してるやつにも生活があって、家族を養ってるやつもいる。お前、自分みたいな子供、増やしちまったこと、分かってるか？」
輝気が青くなって俯く。
「……世の中、分かりやすく悪人と善人が別れちゃいないんだよ。ヤクを売り捌く傍ら、街のチンピラを統率して街の人間を暴力から守ってる組織だってある。それをめちゃくちゃにした落とし前、お前どうやってつけるつもりだ」
かた、と紫色の唇になった輝気が震え出す。
「で、できません──俺には、殺す事しか」
「殺す？殺すことは簡単なんだよなぁ、生かすことの１００倍な。責任取ってお前が壊したファミリアの構成員を全員殺すか？大量に孤児が生まれるだろうなぁ」
輝気はうなだれる。
はーっ、と長いため息をついて、霊幻は眉間を指で揉む。
「……お前、本気で俺の部下になるんだな？」
「！もちろんです！僕の全てをあなたに捧げます！！」
「……じゃあ、お前のケツ拭くのは俺じゃねぇかよ、クソが」
輝気が目を見開く。いま霊幻は輝気がめちゃくちゃにしたファミリアを『なんとかしてやる』と言ってくれたのだ。
「ついてこい。お前が壊したファミリアと直談判だ」
霊幻は立ち上がってファーの付いたコートに手を通す。さりげなく付いてこようとした茂夫と律を学校に送り出し、代わりに芹沢を連れて霊幻は車を走らせた。

「テ、テルキさんっ」
フィオーレファミリアのアジトにつくと、怯えた構成員が輝気を見て叫ぶ。
「アンダーボスとコンシリエーレを呼んで。僕のボスから話がある」
ガクガクと頷いた構成員に、しばらくしてアジトの応接室に通される。
そこにはアンダーボスだけがソファーにすわって３人の部下を控えさせていた。
「テルキさんよぉ、売女連れてきて詫びのつもりか？ならこれからベッドに移動するかな」
コンシリエーレを呼ぶ『格』がないと舐められている。
下卑た笑いに霊幻は美しい営業スマイルを返す。
「無様にもボスを殺されて落ち込んでるんだろう？たっぷりと慰めてやるさ」
「てめぇ！！」
アンダーボスが水のグラスをつかんで霊幻に向かってぶっかけ……ようとして、アンダーボスの部下の１人に止められた。
「この方は我々のドンとなる方です。失礼のないように」
「お、おまえ、裏切ったな！？」
霊幻はパチンとその男にウィンクする。アンダーボスの部下は情熱的な投げキッスで応えた。
「売女がぁ……っ！！」
「なぁ、アンダーボスさんよぉ。部下が止めてくれてよかったな？俺が今日はリードをつけ忘れてきたこと、今、気が付いたんだ」
手を組んで笑う霊幻の後ろで芹沢が銃を取り出していた。
それに気が付いてアンダーボスが顔を青くする。
「チオード（爪）・ファミリアのカネパッソ（狂犬）か……」
は、とアンダーボスは精一杯の虚勢をはって嘲笑う。
「随分と色男をたぶらかしてるじゃないか、情夫上がりのお前が」
「なあに、マフィアなんてみんなそもそも悪魔の情夫みたいなもんだ──それより、俺にそんな口を聞いてていいのか？俺がお前を生かしているのは気まぐれだぜ？」

うっそりと微笑む霊幻。
「俺の欲しいものが分かるか？一杯の冷えた水と、眩しい日差しだけだ。分かるか？いらないんだよ、お前も、お前のファミリーも。さっきから自分に価値があるかのような物言いをしてるが、やめておけ──俺が引き金を引く価値でもあるのかと誤解しちまう。なあ、哀れなアンダーボスさんよ……お前ら全員、何かの役に立つのか（・・・・・・・・・・）？」
品定めされるように言われて、ごくりと青くなったアンダーボスは乾いた口から無理矢理唾を飲み込む。
「…………お、俺たちを、見捨てるって言うのか」
「ふふ……俺が面倒を見なくても、お前らにはテルがいるじゃないか」
「それは困る！テルキさんは遠回しに──」
俺たちに死ね、と言っている。と言いかけてアンダーボスは言い淀む。
降参だ、とアンダーボスはうなだれた。
「──本当はレイゲンさん、あんたが俺たちのボスになると聞いてほっとしてたんだ。アンタならこの世界のことを知っている。だから、助かった、と思った。試すような生意気を言って悪かった。俺たちのファミリアは全面的にアンタの言うことに従おう」
「……お前をボスにして、再度独立してもらってもいいんだぜ？」
「滅多なことを言わないでくれ！俺もコンシリエーレもドンの器じゃない。そんなことをしたらこのファミリアは空中分解する。アンタの傘下でカポをやらせてもらった方がいい。俺にとってこのファミリアは家族だ。なくしたくはない」
「シノギはどうするんだ？ウチはクスリと殺しは──」
「御法度、だろ？親には従うよ。幸いウチはカジノに力を入れてる。贅沢しなけりゃみんな食ってはいける」
「……それだけじゃいずれ無理が来る。仕方ねぇな、何か考えておくよ──」
霊幻は頼られると弱い。そんな霊幻の様子を見て元アンダーボスはほっと肩を緩めた。
「アンタが新しい親で良かった。我らのドンに、血の誓いを──」

元アンダーボスは床に這いつくばって霊幻の靴の甲に口付ける。
──また面倒ごとを増やしてしまった、と霊幻はため息をついた。
結局、輝気が襲った３つのマフィアで同じようなやり取りをして、
霊幻はこれまでの５倍の規模の組織を抱えることになった。

※

「あ゛〜〜〜めんどくせぇ〜〜〜」
「そこは本来喜ぶところだろ」
エクボが呆れたように霊幻に言う。
「俺はさぁ、モブ達のために孤児院を細々と経営しながら、のんびり娼館の世話をやれたらそれで良かったんだよ。なのになんで気が付いたらこんなにデカいファミリアになってんだよ……」
「そりゃお前の組織運営能力が抜群で、人を集める才能がありすぎたからだろ」
「それ、お前にやるわ」
「何言ってんだ」
「……エクボ、俺の代わりにドンやらねぇ？」
「滅多な事言うんじゃねぇよ、馬鹿」
エクボは霊幻の手を取ってその指に口付ける。
「俺様も、芹沢も、シゲオも、律も、……テルも。お前だからドンの椅子の前で膝をつくんだ。このファミリアで、その椅子に座れるのはお前だけだぜ、霊幻」
霊幻は頬杖をついて長いため息をつく。
「椅子の上にナイフがぶら下がってるのが見えるんだよなぁ」
「へぇ、どんなナイフだ？アーミーナイフか？それともサバイバル？」
「バタフライ」
「そりゃあいい、俺たちの蝶にぴったりだ！」
エクボが笑うのを、憮然と霊幻は睨んでいた。

※

「ドン、本当にすまないねぇ」
「いやいい。任せろ」
娼館にて。安い業者じゃ直せなかった給湯器を、霊幻がかちゃかちゃと修理している。
「また同じところが断線してやがった。コードを取り換えて終わりだ」
「本当に何でもできますね、霊幻さん」
感心したように芹沢が言う。
「まあ、マフィア（※この場合は『完璧さ』の意）だからな──」
ガウン、と銃声が響いて。
娼婦の悲鳴が上がった。
「ドン、カチコミだよ！娼婦達は丸腰だ、どうする！？」
「よりにもよって娼館を狙いやがったか」
はっ、と霊幻は嘲笑う。
「性根が腐ってやがるな。女子供を狙うこのやり方は、間違いねぇ。チオード（爪）・ファミリアの残党だろう」
霊幻はやり手婆（※娼館のマネージャー的な女性）に避難を指示して、応戦に向かう。
「そんな！たった２人でなんて」
「大丈夫だ。芹沢がいる。首輪を外そう、芹沢──狩ってこい」
娼婦にからかわれて顔を赤くしていた芹沢から人の良さが消え、目に狂気が宿る。
「はい、ご主人様」
芹沢は懐から銃ではなく──名刺を取り出す。
霊幻が表向きの商売のために芹沢に作ってやったものだった。
乱入者と娼館に配置していた護衛達の間で銃撃戦になっているカウンターに、芹沢が飛び込む。
『能力』を帯びて鋭利な刃物と化した名刺が敵の首を一気に５つ跳ね飛ばした。
「芹沢さん！」
護衛がほっとした声を上げる。
「下がって。相手は能力者だ」
芹沢はバリアを名刺で張りながら敵の中に飛び込み、首をへし折

り、胴を切断し、いなした攻撃の勢いそのまま背骨をへし折る。
「ちっ！」
分が悪いと判断した敵が１人逃げようときびすを返す。
「逃がさないよ」
「待て、芹沢」
とん、と霊幻が芹沢の肩に乗り、跳躍する。
空中で一回転して、その勢いのまま逃亡者の脳天にカカトを決めた。
「こいつには『親』を吐かせる。ころすな──」
「えっ」
遅かった。能力を帯びた芹沢の名刺が男の頸動脈を掻き切っていた。
「す、すみません、良かれと思って──」
「もー！お前は何でいっつも俺の『殺すな』の命令はきかないワケ！？何度目だよ、情報源殺しちゃったの！！」
「すみません、すみません」
ぺこぺこと頭を下げる芹沢に霊幻は肩を落とす。
「まぁいいよ。連中『能力』を使ってたし、どうせチオードファミリアだろ」
「は、はい」
芹沢の目の焦点が合っていない。
はあ、と霊幻はもう一度肩を落とす。
「おーい、ベッド借りるぞ」
「あいよー」
やり手婆から許可を取る。おあつらえ向きに、ここはそう言うことをする場所だった。

※

「ん、んんっ、んんんぅっ」
芹沢に激しく口付けされながら霊幻は器用に２人の服を脱がせていく。高級スーツをダメにはしたくなかった。
「ぐっ」

目が血走っている芹沢にドサッとベッドに押し倒されて、慌てて霊幻は備え付けのローションを指に絡めて後ろを緩める。
「あっ、芹沢、乱暴にするなよ」
待ちきれない芹沢が指を追加で突っ込んでくるのに霊幻が焦る。
「すぐ挿れさせてやるから、っん♡」
芹沢がめちゃくちゃに内部をかき混ぜるので、霊幻のイイところをかすめた。
「はーっ、はーっ」
戦闘モードの芹沢は見つけた『弱点』をぐっぐっと何度も責め立てる。
「やっ♡馬鹿っ、俺を潰す気かっ？♡は、ぁ……っ♡」
じんとした痺れに霊幻は流されてしまう。強いメスイキに身悶えした霊幻に満足して、芹沢は指を引き抜いた。
霊幻の指もつられて抜ける。
「あぁああっ♡」
ずごん、と芹沢が怒張を霊幻に突き立てた。
「んっ♡んっ♡あ♡ああっ♡」
衝動に任せた単純なピストンでも、人よりも大きな芹沢の性器は霊幻の性感帯をごりごりと抉っていく。
「……っく」
霊幻の中に一度吐き出した芹沢は、少しもおさまらずまた挿送を繰り返す。
次は霊幻をひっくり返してバックから突き立てた。
「はぅっ♡はぁっ♡あ、あぐっ♡」
じんじんと痺れる肉壺を掘られるのに耐えきれず、霊幻は快楽の証を性器からこぼした。
「っあん♡」
また霊幻のナカに欲望をぶちまけたが、芹沢の逸物は萎える気配を見せない。
（俺、孕まされそ……）
次は足を高く持ち上げられた、いわゆる種付けプレスの姿勢でガスガスと犯される霊幻は、深いメスイキに翻弄されながら、芹沢の子種を受け止めるのだった。

それから文字通り抱き潰されて。
「すみません……」
叱られた子犬みたいに身体を縮こませる芹沢に、はあ、と霊幻は何度目か分からないため息をついた。
「いいよ、今回は俺の命令で殺してもらったわけだしな。……ほとんどは」
一応釘は刺しておく。
「あ、あの、霊幻さん……実は、俺たちがその、抱き合ってる間に、ネオ・チオード（爪）・ファミリアから手紙が届いたらしくて」
「宣戦布告か？」
「いえ、それが……和解できないか、という詫び状だったそうなんです」
きょとん、と霊幻は目をしばたかせる。
「末端の戦闘員が勝手にやったことだから、落とし前をつけてファミリアとしては和解したい、と……ショウ君が」

その手紙は。

チオード（爪）・ファミリアのドンの、若干１３才の１人息子からという、霊幻をぐらつかせる手紙だった。

続